

大和国における灌漑用溜池の築造と 野井戸の掘削に関する基礎的研究

伊 藤 寿 和

一 はじめに

本稿は、降水量の少ない奈良盆地において、主要な灌漑用水をためていた溜池と、河川の用水や溜池の用水を使用して後、最後の灌漑用水として使用された野井戸に関して、基礎的な検討と復原を試みるものである。

大和国における灌漑用溜池の成立時期とその築造主体に関して、筆者はすでに三本の論文を発表している。すなわち、降水量の少ない大和国、特に奈良盆地においては、古代以来、多くの灌漑用の溜池が築造されてきた。古代・中世においては、盆地の周囲に位置する「谷池」が多く築造され、それに対して、近世の前期と中期、明治期の三つの時期に、奈良盆地の条里地割に規制された底の浅い数多くの「皿池」が築造されたことを明らかにした¹⁾。また、斑鳩地域においては、中世以来、山麓部に位置する「谷池」が法隆寺によって築造・管理されていたことも明らかにした²⁾。さらに、奈良時代の初期、養老7年(723)に律令国家によって築造された矢田池が、平城京の膝下に位置する現在の和歌山県和歌山市南西部の池之内町に比定できる東西6町・南北7町、面積およそ46.5haの面積を有する大規模な楕円形の溜池であった可能性が高いことを論じた³⁾。

他方、奈良盆地の野井戸に関しては、管見の範囲においては、宮本 誠氏の小論⁴⁾があるのみである。宮本氏は、奈良盆地のほぼ中央に位置する田原本町満田における現地調査により、水田内と小規模な河川の底に、87基の野井戸を再確認・図示されている。

宮本氏は、かつて奈良盆地に存在していた野井戸の数として、12000基ほども存在していたと想定する旧『平野村史』の説を引用・紹介されている。

本稿では、大和国、特に奈良盆地における条里地割の施工時期と河川の直線化工事の時期を再検討するに値する重要な溜池関連の史料であるが、歴史地理学はもとより、歴史学においても、未だその存在と重要性が十分認知されていない奈良盆地中央の広瀬郡の平坦地(現在の広陵町百済)に築造された平安時代初期の溜池と、環濠集落として有名であり、渡辺澄夫氏が発見・提唱された均等名荘園⁵⁾としても名高い旧・若槻村(現在の和歌山県和歌山市若槻町)を事例として、各野井戸の掘削年代と規模や諸費用に関して、初めての具体的な検討と復原を試みるものである。

二 広瀬郡の溜池築造について

従来、その存在が十分認知されていない灌漑用の溜池とは、『日本後記』の延暦17年（798）2月3日の条に記載された、奈良盆地中央部に位置する大和国広瀬郡に築造された7町もの面積を有する中規模の溜池である。まず、当該の史料⁶⁾を引いておきたい。

史料一 延暦17年（798）2月3日条

甲寅、右京人正六位上許曾部朝臣帶麻呂等言、大和国広瀬郡、田疇多数、灌漑乏水、伏望以公田七町、築堤為池、同利公私、其功食等、並用私物、許之、

古代の史料が多く残されている大和国においても、奈良・平安時代に築造された溜池に関する史料は多くはない。『日本後記』に記載されたこの溜池築造の記事は、以下において復原・検討を加えるように、灌漑用溜池築造の関連史料として貴重であるのみならず、奈良盆地において施工された古代の広範な正方位の条里地割の施工と、それに連動する河川の直線的な付け替え工事の時期を再検討するに値する、重要な溜池築造の関連史料であると判断される。

平安初期の延暦17年（798）に、平安京の右京に居住していた正六位の許曾部朝臣帶麻呂らが、大和国広瀬郡において田畠は多いが灌漑用水が不足しているため、堤を築いて公田7町を使用して溜池の築造を申請したものである。溜池の築造工事に必要な労働者の功賃や食料は、許曾部朝臣帶麻呂らの私財を用いることが申請され、築造が許可されている。

ただし、大和国司や広瀬郡司などの公的な立場からの溜池築造の申請ではなく、平安京に居住する許曾部朝臣帶麻呂らが申請した具体的な理由は、残念ながら判明しない。単なる慈善事業として、多大な費用を要する灌漑用溜池の築造申請とは考え難く、新規に築造される7町の溜池の灌漑予定の範囲に、許曾部朝臣帶麻呂ら一族が領有する田畑や墾田が所在していたのであろうか。

『日本後記』では、7町もの面積を有する規模の大きな灌漑用の溜池が築造された土地を特定できるのは、奈良盆地のほぼ中央に位置する「大和国広瀬郡」の地名のみである。けれども、現地に残されている小字名と中世の荘園絵図の検討から、7町の規模を有する灌漑用の溜池が築造されたのは、広瀬郡南部に位置する現在の広陵町百済の南西部に比定可能である（図1）。

まず、現在の広陵町百済の南西部の水田地域には、南北に一直線に流れる葛城川の右岸に沿って、およそ7町の範囲において「池ノ内」「小池」「池ノ尻」などの灌漑用溜池に関連する小字名が残されている⁷⁾。平安初期に溜池が築造されたと想定される範囲は、大和国の条里呼称法によれば、広瀬郡の路西21条3里の2坪（小字名・小

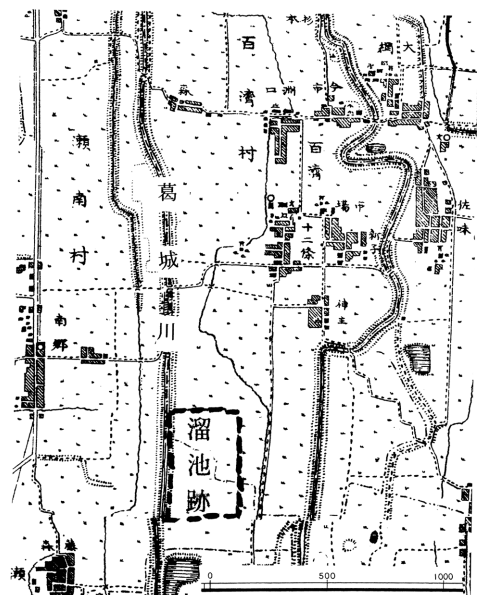


図1 広瀬池（仮称）の比定地
（溜池跡と葛城川を加筆）
（原図は明治期）

池)・3坪(池ノ内)・4坪(池ノ内)・9坪(池ノ内)・10坪(ヨコタ)・11坪(小池)の6坪と、東隣に位置する同じく広瀬郡の路西21条2里の33坪(小池)の一部に比定することが可能であり(図2、図中の破線が溜池の想定範囲。)、この溜池跡の面積は『日本後記』に記載されている許曾部朝臣帶麻呂らによる灌漑用溜池築造予定の面積である7町にほぼ等しい。

次に、この地域が描かれた室町期の大和国談山神社所蔵の莊園絵図である「大和国百済一荘之内屋敷田畠差図」⁸⁾が伝えられており、上記の想定を裏付けてくれる。すなわち、同「百済荘差図」には、平安初期における7町の面積を有する溜池築造を想定した範囲において、広瀬郡の路西21条3里の2坪・3坪・4坪・9坪・10坪の5つの坪には「池ノ内」の地名が、11坪には「スチカ井池内」の地名が記載されており、およそ東西2町・南北3町の範囲に溜池関連の地名が集中的に記載されている。さらに、その東隣に位置する路西21条2里の33坪には「池」、34坪と35坪には「小イケ」の地名が記載されており、現在の小字名から想定した溜池築造の範囲と同一であることが判明する。

すなわち、平安初期に許曾部朝臣帶麻呂らの申請によって築造された7町の面積を有する灌漑用の溜池は、現在の葛城川の右岸に接するおよそ南北3町・東西2町の公田を使用して築造された可能性が高いと判断されよう。溜池が築造された位置は、広瀬郡の最南端に位置しており、許曾部朝臣帶麻呂らの申請の通り、広瀬郡に存在していた田畠の灌漑用水として利用するのに適した位置にあたる。平安初期に築造されたこの溜池を、郡名に因んで「広瀬池」と仮称しておきたい。

この7町もの面積を有する規模の大きな灌漑用の溜池が築造された関連史料の存在と、実際に、許曾部朝臣帶麻呂らによって私財を投じて7町もの溜池が築造された事実は、大和国における正方位の条里地割の施工時期と、それに連動して施工された諸河川の直線化の時期に関する再検討の必要性があると判断される。

まず、大和国、特に奈良盆地のほぼ全面に施工された正南北の大規模な統一条里の地割の施工時期に関しては、考古学の発掘調査に基づいて、古代の飛鳥時代や奈良時代ではなく、平安時代の中期頃もしくは12世紀後半頃に下り、莊園制の再整備に伴って現在まで続く広範な条里地割が施工されたというのが現在の通説となされている⁹⁾。

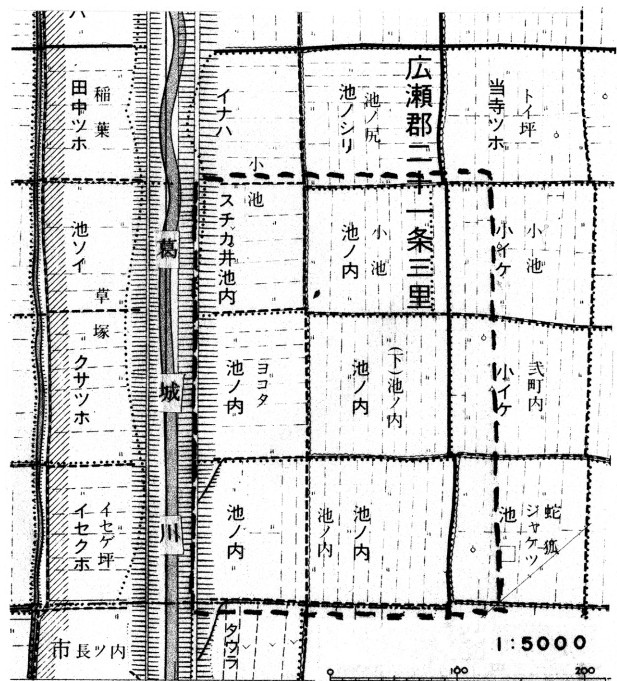


図2 広瀬池（仮称）の比定地
(原図は『大和国条里復原図』)
(葛城川を加筆)

平安初期の延暦17年（798）に奈良盆地中央の広瀬郡に築造された広瀬池（仮称）は、公田7町を使用して築造されたと明記されていることが重要である。すなわち、前稿では東大寺領の清澄荘に関する論文¹⁰⁾で、『続日本紀』の養老7年（723）2月の条には、「始めて矢田池を築く也。」との短い一文が記載されており、現在の和歌山県和歌山市の南西部に位置する池之内町周辺に残されている東西6町・南北7町ほどの規模を有し、その面積はおよそ46.5haと推定されている大規模な楕円形の灌漑用溜池の跡が残されている矢田池の復原と検討をおこなった。

この奈良時代初期の養老7年に築造された矢田池に比定される大規模な灌漑用溜池は、延久2年（1070）に作成された「興福寺領大和国雑役免坪付帳」には、添下郡に所在した小南荘（36町余）の荘田畠の坪付が記載されており、少なくとも、この時期までには大規模な灌漑用の溜池が廃され、周辺部と同じく正南北の条里地割が施工されたものと想定される。

上記で復原した平安初期の延暦17年（798）に築造された7町の面積を有する広瀬池（仮称）の西隣を正南北に一直線の葛城川が流れている。通説では、12世紀を中心とする大開墾の時代に、奈良盆地における全面的な正方位の条里地割の施工と直線的な河川の付け替え工事がなされたと想定されているが、矢田池の水源である富雄川の付け替え工事が中世後期の15世紀以後と想定され、飛鳥川の直線化と付け替え工事の下限が中世後期に下るとの説¹¹⁾も出されている。広瀬池（仮称）の西隣を流れる葛城川の直線化の時期と、広瀬池（仮称）の廃止と、それに伴う溜池跡の条里地割施工の時期も、さらに広範な関連史料の収集と再検討が是非とも必要である。

なお、大和国における内水面漁業と淡水魚食を検討した前稿¹²⁾でも論じたように、奈良時代初期に築造されたおよそ46.5haもの面積を有した大規模な矢田池（仮称）や、平安時代初期に築造された7町の面積を有した中規模な広瀬池（仮称）においても、『日本紀略』弘仁10年（819）12月6日の条に「乾池、捕魚。禁制已久。云々。宜重布告勿令更然。」と記載されているように、すでに奈良時代以来、度々、築造された灌漑用溜池の水を抜いて、溜池で育っていた鯉や鮒、鯰や鰻などの淡水魚を捕獲・食していたことが判明する¹³⁾。

遠く、若草山を遠景に臨む風光明媚な薬師寺の西隣に位置する大池においても、「薬師寺上下公文所要録」の天正14年（1545）6月の条には、「大池之魚濟取事、七条西大路之者沙汰共風聞間、」との記載がなされており、薬師寺により大池の魚を捕ることの禁制が出されていても、膝下の郷民たちにより、実際には大池の魚捕りが行われていたことが判明する¹⁴⁾。大和国をはじめとして、本来は田畠の灌漑用に築造された溜池も、前稿および上記で触れたように、築造当初から近年まで、盛んに淡水魚の生産と捕獲・魚食がなされていたことが判明する。

三 若槻村における野井戸の掘削について

本稿で論じる若槻村は、和歌山県和歌山市の城下町の東南近郊に位置する環濠集落の農村であった。若槻の北隣には、環濠集落として最も著名な稗田が位置している。若槻村は佐保川の左岸、奈良盆地の平坦部の低湿地に位置している。中世には興福寺の大乗院領であった若槻荘は、近世以後は、大乗院の支配から離れて興福寺に属する多くの諸院諸坊領となった。若槻村の面積は、田畠がおよそ33町7反余、高は507石余りの小規模な農村であった（写真1）。

若槻村では、文禄4年（1595）に実施された太閤検地に基づいて作成された「大和国添上郡若

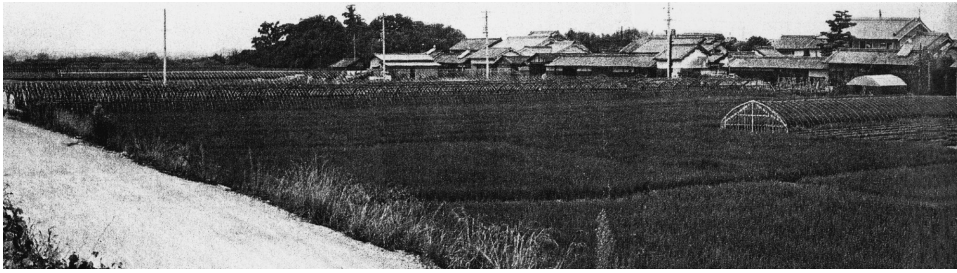


写真1 若槻の集落（注17より引用）

「槻村検地帳写」¹⁵⁾が残されており、耕地は水田31町4反5畝余（約95%）・畠1町7反3畝余からなる、圧倒的に水田が卓越する農村景観を有していた。その水田の大半は、集落の北端に位置している北池（往古池・古池）からの用水に依存していた。北池は、鎌倉時代の後期にはすでに築造されていたことが徳治2年（1307）の「若槻荘土帳」や文正元年（1466）の「若槻荘土帳」などの史料¹⁶⁾から判明する、平坦地に築造された条里地割に規制された矩形の古い灌漑用の皿池であり、聖徳太子築造の伝承を有する若槻の東方約3kmに位置する大規模な廣大寺池から導かれた用水を溜めている（写真2）。ただし、鎌倉時代の後期には東西1町・南北3町の細長い面積を有していた北池（往古池・古池）は、近世には東西1町・南北2町の面積に縮小されている。北池が縮小された年代は判明しないが、縮小されて水田となされた北池の南の水田の小字名は「池上」と「池尻」であり、文禄4年（1595）に実施された太閤検地においては、すでに「いけのかミ」「いけしり」の小字名を有する水田が記載されており、この時点までには縮小されていたことが判明する。

また、小規模な天井川でもある菩提山川が集落の南端を東西に流れており（写真3）、その菩提山川に接する位置に、近世の寛政12年（1800）に南池（大將軍池）が新規に築造された。さらに、明治以後に若槻の環濠集落の南西に里池が築造され、これら三つの溜池と、若槻集落の周囲に掘り巡らされた本来は2間の幅を有していた環濠の水も、田畠の用水として利用されてきた。

かつては、奈良盆地に所在する他の村々と同様に、環濠で囲まれた若槻集落の周辺には、田畠の広がる農村景観が展開していたが、戦後、団地や学校などの建設が進められ、均等名荘園として著名な当時の農村景観はすでに失われており、現地に立って野井戸を探すことは難しい。各野井戸は水田の耕土の下や、水田の横を流れる用水路や小河川の下に埋もれていた。現在では、若槻の住人であっても、かつて存在していた野井戸の位置を探すことは難しい。

通常の年であれば、北池からの用水と、南池からの用水で村内の田畠の耕作が行われたが、早



写真2 北池（注17より引用）



写真3 菩提山川（注17より引用）

魘の年には、それら両溜池からの用水も使い切り、最後の命綱となったのが、各水田や用水路・小河川の底に掘られていた野井戸から汲み上げられた湧水であった。

管見の範囲においては、村々の最後の命綱の湧水となった野井戸の掘削に関連するまとまった史料は多く残されていないが、幸いにも、若槻村には幕末の嘉永6年(1853)に作成された「歳々綿地覚并井戸願覚」¹⁷⁾(以下、「井戸願覚」と略記する。)が残されており、近世後期に掘削された野井戸の実態が判明する貴重な史料・事例であると判断される。その一部を示せば、以下の通りである。

史料2 嘉永6年(1853) 歳々綿地覚并井戸願覚

丑年井戸願

清浄院様入 大持院合地

一 壺石三斗五升 勘兵衛

長 壺間

横 五尺五寸

深サ 貳間

(中 略)

一 ふた板 桧貳寸板 壺坪

代三拾七匁八ト

一 堀賃

代四拾五匁

一 大工手間 三人

代拾匁九ト

メ百七拾三匁九ト

百五拾三匁九ト 願高

半通

七十六匁九ト五厘 下ル

一ヶ年ヶ切

幕末に作成された「井戸願覚」には、新規に掘削された18基の野井戸の詳細と、すでに掘削されて存在していた野井戸の底堀の事例が2基、記載されている。新規に掘削された18基の野井戸に関しては、①掘削の年、②野井戸の規模(縦・横・深さ)、③堀賃、④大工の人数、⑤工賃の合計、⑥領主から下された工賃などが判明する。

まず、この「井戸願」に記載されている新規に掘削された18基の野井戸の所在地を復原することから始めたい。「井戸願覚」には、実際に各野井戸が掘削された水田の所在地を比定できる小字名は記載されていない。けれども、「井戸願覚」には野井戸が掘削された水田を領有していた「清浄院」など興福寺の各院坊の名前と、「壺石三斗五升」などの年貢高、各水田を名請・耕作していた百姓の名前が記載されている。幸いにも、若槻村には、近世後期の文政5年(1822)頃に作成されたと想定される18枚の「若槻村小字切絵図」¹⁸⁾が残されている(図3)。さらには、万延元年(1860)の「大和国添上郡若槻村検地帳写」¹⁹⁾が残されており、若槻村の各水田を領有していた興福寺の100に近い院坊ごとの田畠と屋敷地が記載されている。

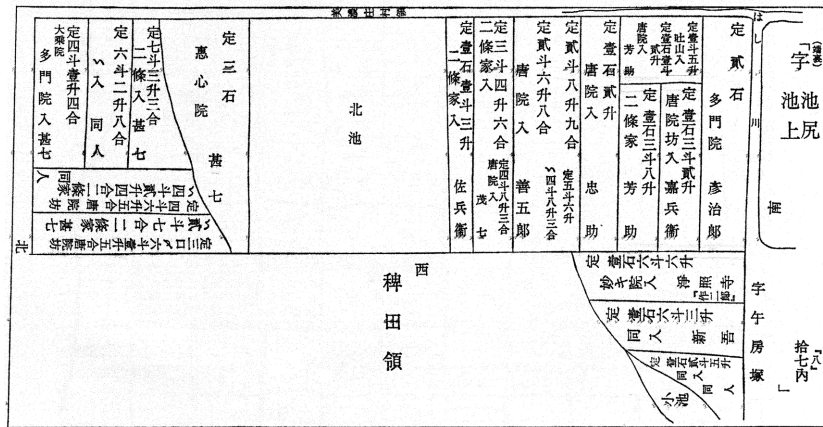


図3 若槻村小字切絵図

嘉永6年(1853)の「井戸願覚」に記載された幕末に新規に掘削された18基の野井戸に関して、「若槻村小字切絵図」と万延元年(1860)の「検地帳写」の三史料を突き合わせ、野井戸が掘削された水田の小字名・水田を領有していた興福寺の院坊名・名請していた農民の名前を、それぞれ逐一検討した結果、17基の野井戸の位置がほぼ判明した。新規に掘削された17基の野井戸と、それ以前に掘削されていた2基の野井戸、合計19基の野井戸の位置を復原・比定したものが図4である。ただし、野井戸が掘削された水田の位置は比定できたが、各野井戸が水田のどの位置に実際に掘削されたか判明しないため、各水田の中央に●を便宜的に付している。

なお、史料2に記載されている18基の野井戸の他にも、すでに掘削されていた古い野井戸が存在していた可能性が高い。古い野井戸の存在を示すのが弘化3年(1846)に作成された「若槻村田所持田地反畝有歩高定細見帳写」²⁰⁾である。この「細見帳写」には、8基の野井戸に関する記載がある。図4には、その8基の野井戸も含めて図示している。

宮本氏は、奈良盆地の中央に位置する田原本町満田において、1984年の聞き取り調査に基づいて、36haの集落内に84基の野井戸(個人所有81基・村共有3基)を確認し、その分付図を示している。管見の範囲においては、奈良盆地において野井戸の詳細な分布を示した唯一の貴重な成果である。宮本氏が提示した満田の野井戸と同様に、若槻村においても、新規に掘削された野井戸は、村全体に散在して掘削されたことが判明する。

若槻村において幕末に掘削された野井戸に限れば、村共有の野井戸の新規掘削は認められず、18基すべてが個人での掘削である。

野井戸の掘削年代に関しては、宮本氏は「野井戸のくわしい歴史は明らかでないが、少なくとも近世にさかのぼる。」として、若槻村と同じく近世後期の天保10年(1839)の宮森村における野井戸の新規掘削の史料を紹介されている。若槻村で作成された「井戸願覚」で明らかのように、奈良盆地に数多く掘削された野井戸は、近世後期の1800年代以後に多く掘削されたと想定されよう。

次いで、野井戸の規模に関して、宮本氏は、個人所有の野井戸は3尺四方の小規模なものであり、村共有の野井戸は1間四方の大きなものであるとし、個人所有の掘削の場合は3尺四方の木枠(図5)を制作し、これを3個から4個(およそ2.7mから3.6m)分重ねて掘り下げると、砂の層が出て水が湧き、これ以上、掘り下げると人力での撥ね釣瓶(図6)での汲み上げは困難で

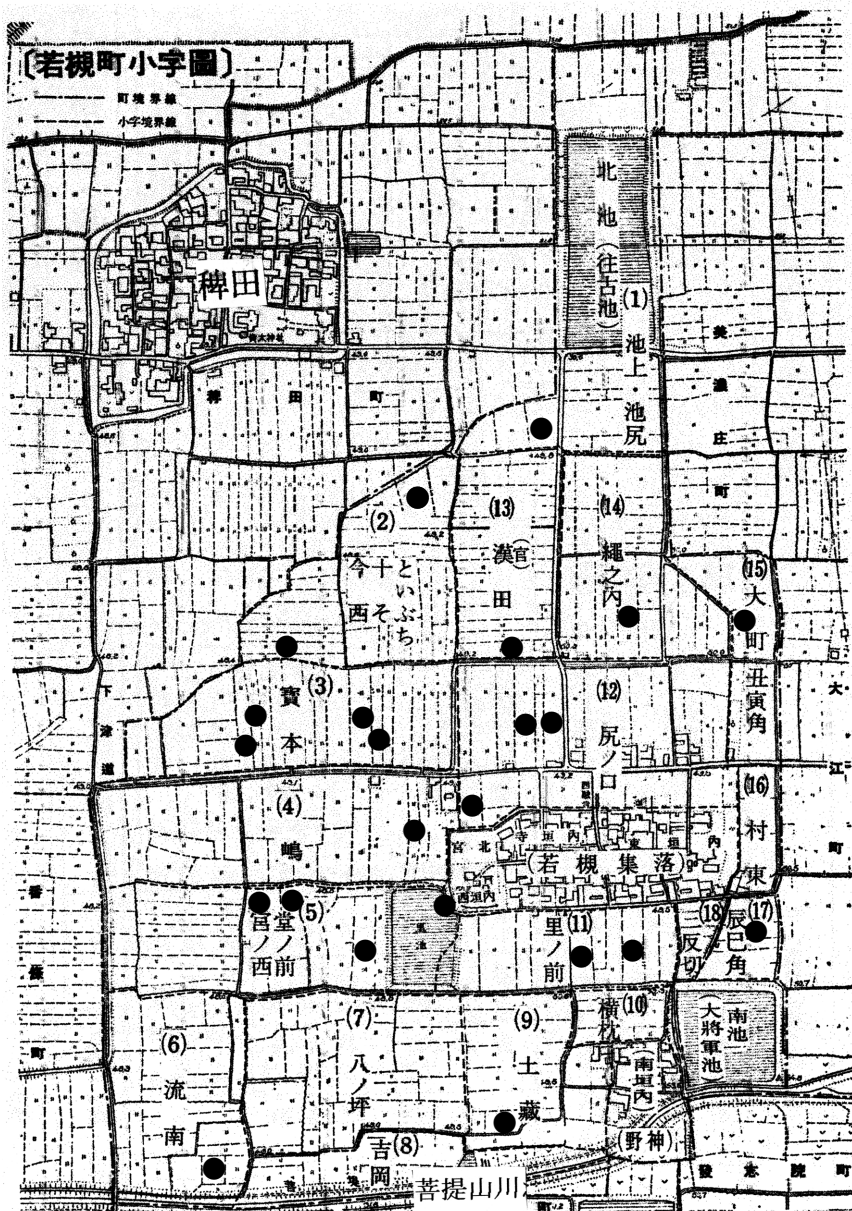


図4 若槻村の野井戸の分布

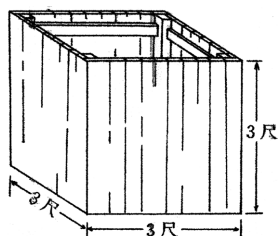
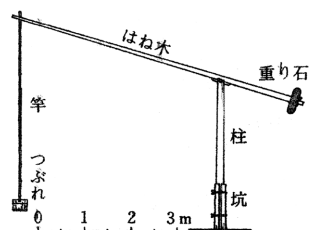


図5 野井戸の木杵（宮本論文より引用）



注) 藤本治男氏宅(田原本町満田)所蔵のはねつるべを実測。

図6 満田のはねつるべ（宮本論文より引用）

- ① 図8・①は文化11年（1817）の「反畝覚帳」の欄外に描かれた水田と野井戸の絵図である。この野井戸が掘られていたのは小字・島北裏の水田であり、興福寺の塔頭である徳蔵院の領有する水田であった。野井戸は「杭ヶ壺間西」の位置に掘られていたことが明記されている。また、弘化3年（1846）の「細見帳写」にも、ほぼ同形の水田と野井戸が描かれており、水田の中に「此井壺間四方深サ貳間 前之方ニ古井戸あり。水多くわく候得共、此田地水持かるし。」との詳細な付記がなされている。この野井戸の規模は1間四方、深さは2間であり、南方に古井戸があって湧水が多いものの、この水田の水持ちが良くないことが判明する。
- ② 図8・②は、小字・辰巳角に掘られた野井戸の絵図（以下は、「細見帳写」に付された絵図である。この野井戸は南の畔から約2間、西の畔から約6間はなれて掘られており、野井戸が掘られた年次と規模は「文政六年未年ニ掘、井戸ノ形、下壺間 深サ壺間四方、上半間三尺ニ四尺四方」「此田地壺枚如何程之早魃ニ而もいけ可申、余水ハ三反切へかえるべし、」と付記されている。この付記によれば、この野井戸は、文政6年（1823）に掘られ、如何なる早魃においても枯れない野井戸であったことが判明する。
- ただし、付記された野井戸の形の記載からすれば、この野井戸は、上部と底の大きさが異なる野井戸であった可能性がある。
- ③ 図8・③は小字・里ノ前に掘られた野井戸の絵図である。この野井戸は、字里ノ前に位置

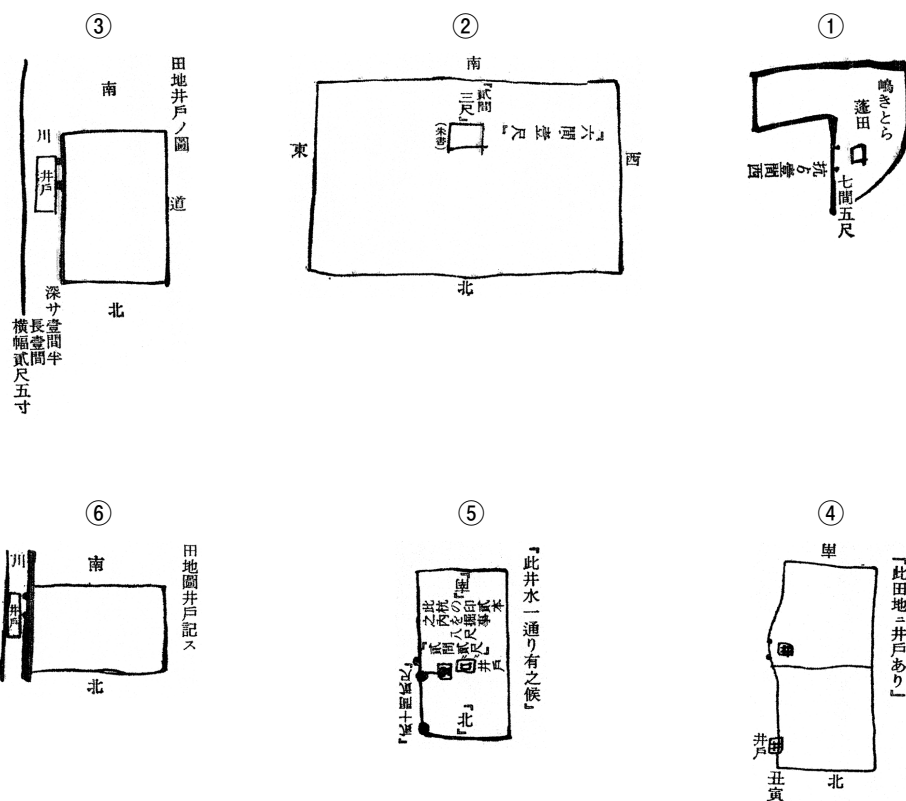


図8 若槻村の野井戸付図

する水田の東隣を流れる小さな河川の底に野井戸が掘られていたことが記載と絵図から判明する。「細見帳写」には、異筆にて「此田地東ノ方之川ニ井戸アリ、此井戸ニ而田地干損之節、養かたく、辰巳角之井戸分水浚ル者也、」との付記がなされている。

若槻村では珍しく、水田の中ではなく、水田に沿って流れている小さな河川の中に、縦1間・横2尺5寸・深さ1間半の規模を有する細長い野井戸が掘られていたのである。ただし、小さな河川の中に掘られたこの野井戸の湧水では、旱魃の折に当該の水田を養うことができなかったことも付記されている。

- ④ 小字・堂之前に位置する水田の中に掘られた野井戸には、残念ながら、絵図は付されていない。「此田地丑寅角堀之中ニ井戸アリ、但し並ニ式ツ井ニ成、」との異筆の付記がなされている。これに基づけば、明治以後に新しい灌漑用の溜池として築造された里池の位置に、かつて存在していた水田に掘られていたこの野井戸も、水田の中に掘られていたものではなく、当該の水田の北東に位置していた若槻の集落を取り巻く幅2間の環濠の中に掘られていたことが判明する、貴重な事例の野井戸であると判断される。管見の範囲においては、奈良盆地において数多く存在していた中世以来の環濠集落を取り巻く堀の中に、灌漑用の野井戸が掘られていたことが確実な史料の上から判明する唯一の事例である。

その若槻の環濠の南西部に割られていた野井戸の規模は、東西に2基の野井戸が掘られており、西の野井戸は文政年間（1818～1830）に掘られた1間四方の規模であり、東の野井戸は深さ1間5尺に、底は4尺5寸×5尺の規模を有したものであった。

- ⑤ 小字・ワラケに位置するこの水田は、図8・④のように南北に二枚並んでおり、それぞれの水田に野井戸が東側の畔の近くに掘られていた。南の水田の中に掘られた野井戸は、東の畔から1間の場所に、1間四方・深さ2間の規模であった。この野井戸は文政9年（1826）に新規に掘られたことが付記され、「此井水すくなし、」とも付記されている。また、北東の水田の畔に掘られた野井戸は安政2年（1855）新規に掘削され、「水すくなく候得共、此田地井戸式ツ在之候間、式ツ分ならば此田地やしないできる事、」と付記されており、南北ふたつの野井戸共に湧水の量は少ないが、ふたつの野井戸の湧水を足せば、1枚の水田を養えたことが判明する。
- ⑥ 図8・⑤の小字・宝本の水田に掘られた野井戸は、幕末の嘉永6年（1853）に新規に掘削されたことが付記されている。野井戸は水田の東の畔から2間8尺、水田の北東の隅から20間2尺の場所にあり、野井戸の規模は1間四方で、深さは1間より2間半余と付記されている。付記されている「深サ壱間分式間半余、」の意味が十分取りづらい。また、絵図の横に付記された「此井水一通り有之候」の一文は、この野井戸の湧水によって、旱魃時においても、水田を養いうる湧水量があったものと理解できようか。
- ⑦ 同じく小字・宝本の他の水田には、幕末の嘉永6年（1853）に野井戸がもう1基掘られたことが付記されている。同年は150日ほど続く大旱魃の年であった。この野井戸が掘られた水田には、すでに湧水が湧かずに使用されなくなっていた「古井戸」「隠居井戸」呼ばれる野井戸が存在していたことも付記されている。そして、野井戸の規模は判明しないが、「はね木式丁に而かえる約束也、」と、野井戸からに2本の撥釣瓶にて湧水を汲み上げていたことが判明する唯一の付記がなされている。

また、上段の余白には、「此田地北 露川へ掛り、あせ掛り、深サ貳間之井戸あり、底水ニ候得共、わきつよく、此井ノ北浦田地へ浚可申事、」と付記されており、この水田の北側を流れている露川すなわち用水路の中に、深さ2間の野井戸が掘られており、湧水の量も多かったことが判明する。

- ⑧ 小字・土蔵に位置する1反5畝10歩の上田に掘られていた野井戸は、図8・⑥のように水田の東を流れる小さな河川に掘られていた。掘削された年代は不明であり、野井戸の規模は、縦1間・横3尺・深さ2間であった。ただし、「右井戸水すくなし、右田地やしないがたく、」と付記されているように、野井戸からの湧水は少なく、1反5畝余の水田を養うには十分ではなかったことが判明する。

以上のように、各野井戸が実際に掘削された水田内外の位置や規模、さらには湧水量も、まさに多様であったことが判明する。

四 まとめにかえて

本稿は、降水量の少ない大和国、特に奈良盆地に数多く築造された灌漑用の溜池のうち、学会に十分その存在が認知されていない広瀬郡に築造された溜池と、河川と溜池からの用水を使用した後に最後の命綱として使用された湧水である野井戸の掘削に関して、基本的な復原と検討を加えたものである。明らかにしえたさやかな成果は、以下のようにまとめることが可能であろう。

第一に、『日本後記』の延長17年（798）2月3日の条に記載された溜池の新規築造の申請と許可に関する記事は、現在の奈良盆地のほぼ中央部の平坦地に、7町の公田を使用して新規に築造されたものと想定される。新規に築造された具体的な位置も、広瀬郡の最南端にあたる現在の広陵町百済の南西に比定される。

第二、平安初期に新規築造された溜池である広瀬池（仮称）は、平安京に居住していた許曾部朝臣帯麻呂らの申請どおり、7町の面積で築造され、その池跡には、現在も「池ノ内」「小池」「池ノ尻」などの小字名が残されている。広瀬池（仮称）は、いつの時期にか廃されて、周辺地域と同様の条里地割に基づく水田・畠となっている。広瀬池（仮称）の西隣には葛城川が南北に一直線に流れている。奈良盆地において現在の地表面まで続く大規模な正南北の条里地割と、同じく条里地割に規制されて一直線に流れる諸河川への付け替え工事の時期の問題にも、一考を要する事例であると判断されよう。

第三に、均等名荘園として名高い現在の大和郡山市若槻町には、幕末の嘉永6年（1853）に作成された「井戸願覚」が残されており、18基の野井戸の新規掘削に関する具体的な実態が判明した。まず、水田の中や周囲を流れる小川と用水路、さらには若槻の集落を取り巻く環濠の底にも掘られた野井戸は、その大半は近世の後期、1800年以後に掘削されたものと考えられる。各野井戸の規模は、深さは2間が多いものの、縦・横の大きさは横5尺を基本とするものの、縦の長さは1尺から1間1尺まで多様であった。

第四に、各野井戸は各水田を名請・耕作していた農民の全額負担によって掘削されたものではなく、領主であった清浄院をはじめとする興福寺の諸院坊が、野井戸掘削費用の一部を「井戸銀」

として下していたことが判明した。各院坊から下された「井戸銀」の額は、各野井戸の規模により差が認められ、農民たちが申請した額のおよそ5割から6割の「井戸銀」が下されていた。

第五に、各水田に一つの野井戸が掘削されていた訳ではなく、湧水が湧かなくなれば新しい野井戸が掘られており、残された関連史料による限りにおいては、旧若槻村の全域に散在する形で、およそ20基余の野井戸が掘削されていた。野井戸の形態は、間口と底が同一規格のものが大半であるが、同一規格ではないと想定される事例も見受けられた。

本稿で明らかにしたのは若槻村に関する野井戸の実態であり、他村においては、近世の前期や中期に遡って掘削されていた野井戸の存在も想定されよう。今後、さらに関連史料を博捜し、奈良盆地で数多く掘削され、河川や溜池の用水を使い切った後、最後の命綱の湧水となされてきた野井戸の実態を、さらに明らかにしたいと念じている。

付記

大学一回生の折、環濠集落で有名な稗田と共に、若槻の環濠集落をご案内下さり、渡辺澄夫氏と『大和国若槻庄史料』を編纂された喜多芳之氏のお宅にて、喜多氏より貴重なお話を伺いました。ご案内下さり、学部生の頃よりご指導賜りました林 宏先生のご霊前に、本稿を謹んで献呈させていただきます。

注

- 1) 伊藤寿和 (1993) 奈良盆地における灌漑用溜池の築造年代と築造主体、人文地理、45巻2号。
- 2) 同 (1987) 斑鳩地域の溜池をめぐって、歴史地理学紀要、29号。
- 3) 同 (2001) 東大寺領大和国清澄荘に関する歴史地理学的研究、日本女子大学紀要・文学部、50号。
- 4) 宮本 誠 (1994) 『奈良盆地の水土史』、農文協。
- 5) 渡辺澄夫 (1956) 『機内庄園の基礎構造』、吉川弘文館。
- 6) 『日本後紀』延暦17年2月3日の条。
- 7) 奈良県立橿原考古学研究所編 (1981) 『大和国条里復原図』、吉川弘文館。
- 8) 東京大学史料編纂所編 (1988) 『日本荘園絵図聚影』、近畿2、東京大学出版会。
- 9) 中井一夫 (1982) 条里制研究の現状と課題、条里制の諸問題Ⅰ。
寺沢 薫 (1987) 奈良県多遺跡の条里遺構と二、三の問題、条里制研究、3号。
同 (1991) 大和国における中世開発の一樣相 一箸尾遺跡の調査と小東荘一、条里制研究、7号。
- 10) 前掲3)。
- 11) 前掲4)。
- 12) 伊藤寿和 (2016) 大和国における内水面漁業と淡水魚食の実態に関する基礎的研究 一興福寺一条院坊官『二条宴乗記』を主な史料として一、史草57号。
- 13) 『日本紀略』弘仁10年12月6日の条。
- 13) 「薬師寺上下公文所要録」、史学雑誌79巻5号にて、史料紹介と翻刻がなされている。
- 14) 渡辺・喜多編 (1973) 『大和国若槻庄史料』、第一巻、吉川弘文館。
- 15) 前掲7)と前掲14)。

- 16) 渡辺・喜多編（1975）『大和国若槻庄史料』、第三卷、吉川弘文館。
- 17) 渡辺・喜多編（1974）『大和国若槻庄史料』、第二卷、吉川弘文館。
- 18) 前掲17)。
- 19) 前掲17)。
- 20) 前掲17)。
- 21) 前掲17)。
- 22) 前掲17)。